

の思いを伝えたいし、他人が自分に言うことを理解したいのである。私たちは、語彙力の高い人の心が落ち着いていることを知っている。少年たちは、自分たちの語彙力と落ち着きを、どのようにしたら高められるかを本能的に学んでいったのである。少年院での指導を通じて私が学んだことはどんな子どもも、もっと学びたい、知りたい、愛されたい、認められたい、誉められたい、自由でありたい、人のお役に立ちたい、という本質的な望みを持っていることである。

私は、微塵の疑いもなく、すべての子どもたちは素晴らしいと、固く信じている。

【進路決定・学問追求と公文式学習】 望月洋佑

受験勉強の知識で、大学内で役立つものはどれくらいあるだろう。全てが役立つとは言い難い。難しい問題をこなすことだけが勉強ではないはずで、そういう意味では基本を大事にしている公文式は、ただの学習教材以上のものを持っている。

また、公文式の大きな柱の一つである「自学自習」は、大学の中で自分が勉強をすることの大きな力になっている。高校までとは異なり、興味のある分野を自分で見つけ、学んでいくべきである大学に入って、自学自習の習慣がついているのとそうでないのでは、スタートから大きな違いがある。僕は、13年間、公文式教材を解いてきたが、学力だけでなく、様々な力をつけることができたと考えている。

縦断的研究による早期公文教育の発達の考察

藤永 保

早期英才教育はここ2-30年来広く話題を賑わすトピックスの一つであった。しかし、この論議はいつも不毛のまま終わる印象を受けるが、一半の理由は、問題を掘り下げるための実証的資料が乏しく、賛成・反対も両意見が感情論の域に止まることが多いためであろう。これについて一つの資料をうるため、公文の幼児教室で、早期から、ときに家庭との協働によって、公文教育のかなり高い到達度に達した子どもたちのその後の成長、特に数学能力の発達についての追跡研究をおこなった。ここでは、そのうち、いわゆる幼児方程式達成者がその後どんな進路を選ぶか、幼児期に高い進度に達する子どもの性格特性、いくつかの事例研究結果などについて概観する。

幼児方程式達成者の計算技能は青年期に達してもいぜんとして保持されているが、数学を必要とする分野に進むか否かは、その後の興味の広がり特に青年期の関心事という条件と関連するものようである。また、幼児期に高い到達度にいたる子どもには性格的安定度の高いタイプが多く、くり返し学習への耐性の高低が要因として大きい。数学能力・一般知能などと並んで性格要因も重要であることは、示唆に富む。また、個別の事例研究から、高い成功例では、母親が子どもの意欲を支え、学校教育の圧迫から守るためにさまざまな教育的方策をとっている。当然ながら、早期教育の成功は、その後の発達過程やその他の条件に依存し、必要・充分条件の判別が望まれる。

ハントの「対応の問題」と「ちょうどの学習」

宮原和子

J. マックビカー・ハント(J. McVicker. Hunt)の教育理論である「対応の問題(The problem of the match)」と公文式教育の中心をなす「ちょうどの学習」とは、理論と実践の関係にある。公文式教育は、公文 公によって実践的教育として始まったが、その教育実践の基盤となる理論がハントの「対応の問題」である。「ちょうどの学習」とは、子どものもっている能力、学力よりも少し程度の高い教材を用意することによって、子どもはその教材を理解し、子どもの能力・学力は向上するというものである。ハントと公文式教育・公文公との間には、全く個人的な接点はない。にもかかわらず、ハントがその豊富な心理学的知見から定式化した「対応の問題」、子どもの能力、発達のレベルより「少し程度の高い」「適切なズレ」をもった環境が子どもの能力を向上させ、子どもの意欲や自発性を培うという教育理論は、まさしく公文式教育の理論的枠組みであるといえる。

しかも、この理論の中には「認知的なズレ」「知的なズレ」が自発性や意欲といった情動的な心性を誘発するという「内発的動機づけ」のメカニズムが存在する。「対応の問題」としての教育理論は、知的能力だけでなく、同時に、自発性、意欲といった情動をも育成するところに教育理論としての神髄がある。そうであれば、公文式教育においても学力の伸長だけでなく、ある意味ではもっと重要な[子どもの学習に対する意欲]にも、もっと目を向けていかなければならないであろう。